
真・恋姫＋無双 覇道凱旋伝

天叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 霸道凱旋伝

【Nコード】

N9645Y

【作者名】

天叢雲

【あらすじ】

世界を敵にし、死に絶えた“霸王”は新たな人生を歩む。

そこは三國志の・・・孫堅が女性の世界だった・・・。

ちなみにこれ、織斑家の最強親父の基になったやつです。

霸王、死すとのこと。

「……誰も……我^{オレ}を満たしてくれない」

男は絶望し、嘆く。

「己の強さ」。

周りの弱さに。

世界の脆さに。

「我が生きる意味も意味を為さない……我^{オレ}は何のために生きる？」

2

男は幼い頃から孤独だった。

類い稀なる才能。

他を圧倒する才能。

全てを凌駕する才能。

全てを知り得る才能。

それが男を孤独にした要因。

幼き日、男は両親に気味悪がられて捨てられ、今まで一人で生き抜いた。

「誰か我を楽しませる者はいないのか・・・」

男は渴望する。

自分の好敵手たる存在。

自分を理解してくれる存在。

自分を愛してくれる存在。

それらは男が手に入れたくて止まない存在。

「もう・・・我が人生に道はない。ここで果てるのもまた一興か・・・
ふっ。思えばなんともくだらぬ人生よ」

男は我が手を見る。

血にまみれた手。

戦い抜いた手。

傷がある手。

それは男の歩んだ道を示すものだった。

戦い。ただそれだけで生きてきた武人の証たる両手であった。

男の名はない。とうの昔に忘れ、捨て、そして呼ばれることがなくなつた。

「まあ、よい・・・我はもう疲れた・・・」

男は静かに目を閉じると周りに燃え盛る炎に身を委ねるようにした。

男に名はない。だが、男はこう呼ばれていた・・・。

“霸王”と・・・。

今、霸王の新たなる人生が始まる・・・。

霸王、外史の大地を踏むとのこと。

・・・む？ここは・・・なぜ我は生きている？

「・・・見渡す限りの大地、いや、荒野か・・・我は脱出したわけではないのだが」

確かにあの時、我は炎と共に我が城と灰に帰したはず。

なのになぜ我は生きている？

「まあ、よい。我が生きるならばそれは天からの命。生きている意味は探せばよいな」

我は立ち上がると服についた埃や土を払う。

服装も我が世界を統一し、破壊したときと変わらない血のように紅いロングコートのままだった。

他には変わった場所はないが妙に氣が溢れ、覇気は全盛期の我と同等かそれ以上に感じた。

あとは少し背が低くなり、声も少し高くなって生やしていた鬍もなくなっていた。

「・・・ふむ。わからないことだらけで混乱するな・・・まずは近くに村がないかを探すとしよう」

取り敢えず我は近くに村がないかを探すことにし、辺りを歩くことにした。

その間に、自分の体のスペックを改めて確認することにする。

氣もそうだが、今まで我の力となっていた覇氣もかなり強化されている。

腕力も脚力も生前よりも遥かに凌駕し、体が軽く感じる。

「・・・む？血の臭い・・・近くで戦いか？」

それはあり得ない。と思いたい。

我は世界を統一した際に争い事を無くすためにあらゆる武器を破壊し、人の体を傷つけにくくしたはず。

ならばなぜ？

我が出した結論が誤りであることを祈りたいものだな・・・。

我は血の臭いがする場所に一目散に駆ける。

やはり、スピードもかなり上がっており、風のように駆けることができた。

「ふむ。いい感じだ。これならばまだ戦えるであろう」

しばらく駆けること二十分。

前方から何か焼ける臭いと濃い血の臭いが強くなってきた。

同時に、村のようなものが見え、家が燃えてるのか、黒い煙がのぼっていた。

・・・また、賊か。

「まずは村に住むものの救出を最優先にし、賊がいるならば・・・叩き潰す」

最後に地面を思いつきり蹴ると村を見渡せる崖の上に飛び乗る。

そこから見えるは地獄。

昔ながらの農民のような服を着たものが多く、一方は刃物などを持って暴れており、略奪などをしていた。

「・・・む？時代が違うのか・・・？我が生きた国はあんなものではないはず・・・っと。まずは助けようか」

氣で体を強化すると高い崖の上から飛び降り、逃げる子供と母親を追う賊の前に来るよう調整する。

そして下卑じみた笑いをする賊を上から踵落としをし、体を真つ二つにした。

「へ？」

他の賊が呆けている間に一気に懐に踏み込み、二人を手刀で首を切り落とす。

血で体を汚すのも構わず、さらに賊に近づいて数を減らしていく。

「な、なんだ!？」

「戦いの最中だ。余所見などしては命を落とすぞ」

子供と母親らしき人物を追い掛けていたのは全部で七人。

三人は片付け、残るは・・・三人か。

賊の頭を握り潰しながら残った三人に目を向ける。

「ひ、ひい！？お前、なんなんだよ！？」

「貴様に名乗る名前はない・・・と言いたいところだが名前はないのでな・・・」

「やっちまえ！」

「・・・人の話は最後まで聞く気はないのか・・・まあ、よい」

剣を持って走ってくる賊にカウンターで顔を殴ると破裂し、首が吹き飛んだ。

さらに横から斬りかかる賊の剣を指ではさんで止めると剣を叩き折る。

驚く賊を無視して蹴りで腹に穴を開けて絶命させる。

「自己紹介、にはならぬが・・・」

瞬間、辺りに濃密な殺気と圧倒的な覇気が満ち、賊は怯え始める。

「我は霸王。とある国にて王として生き、今はただの武人だ」

さあ・・・我が覇道を見据えよ。怯える。刮目せよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9645y/>

真・恋姫十無双 霸道凱旋伝

2011年11月30日00時53分発行